

音響音声学に基づく “Left” と “Right” の分析

—児童の混乱要因と指導の手立て—

岡本真砂夫（姫路市立八幡小学校）

キーワード： 母音 フォルマント Praat

1. 研究の目的

“Left” “Right” はカタカナ英語としても定着しており、児童には馴染みが深い。児童に「レフト」「ライト」を弁別できるようにした上で ALT の “Left” “Right” を聞き分けさせたところ、どちらか認識できない児童が多くいた。“Left” “Right” を用いたゲームに取り組んだ際には混乱が発生し、児童からは「違いが分からない」との声が挙がった。そこで、混乱の原因を音響音声学から分析することにした。

2. 研究の方法

姫路市立八幡小学校 6 年生 1 クラスで行われた授業の映像、音声を用いて実態観察を行った。その上で日本語母語話者 1 名と英語母語話者 4 名の “Left” “Right” を録音し、音声分析ソフトウェア Praat を用いてそれぞれのフォルマント値を算出した。音声を同じ長さで揃え、時間軸と周波数軸にそれぞれをプロットし、フォルマント値の推移を比較した。また、F1, F2 の数値からそれぞれの調音点を推定した。

3. 結果

“Left” と “Right” は流音[l]と[r]、母音[ε]と[a₁]の F1, F2 が似ていることが確認された。これが混乱の原因だと考えられる。また、[l] [r] は F3 に大きな違いがあり、日本語には存在しない特徴である為、弁別が難しいことが確かめられた(川原, 2015)。Hi, friends! 1 における[ε]の出現数は 63 で母音全体の中で最も多く、[a₁]の出現数は 61 で母音全体の中で 2 番目に多い(上斗・三宅・西尾, 2017)。“Left” と “Right” を通じて、母音[ε] [a₁]の音の特徴に気づかせられると考える。

4. 結論

“Left” と “Right” は二者択一で用いられるので聞き分けが重要だが、日本語母語話者には F3 の発声が難しいため、ALT と授業を行う意義が確認された。

参考文献

川原繁人. (2015). 音とことばのふしぎな世界 : メイド声から英語の達人まで. 岩波書店.

上斗晶代・三宅美鈴・西尾由里. (2017). 小学校英語活動に資する発音指導マニュアルの作成に向けて: 英語音声指導の実態調査と教科書分析を基に. 大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要 = *JACET Chugoku-Shikoku Chapter Research Bulletin*, (14), 143-160.